

診断と経過観察に超音波検査が有用であった腹膜偽粘液腫の1例

木下 博之, 竹中 正人, 大前 嘉良, 中戸 洋行, 東山 晴美, 玉井 淳代
片井 敦雄 (社会保険紀南総合病院)

【はじめに】腹膜偽粘液腫は、腹腔内に多量の粘液様物質が充満した病態であり、術前に診断することは比較的容易とされているが初発症状に乏しく、進行した段階で発見されることが多い。今回、急性虫垂炎の手術後4年で腹膜偽粘液腫と診断された1例を経験したので報告する。

【症例】症 例：76歳、男性。

主 訴：腹部不快感。既往歴：1996年、穿孔性虫垂炎
現病歴：上腹部不快感続いたため2000年11月17日、
近医より当院外科受診。

【来院時検査】血液生化学検査：CEA 12.3 ng / mlと上昇、Hb 12.6 mg / dl。

腹部超音波検査：左下腹部に34×54mmの腫瘤を認めた。腹水貯留し、直径10mmの高エコーが無数に浮遊。

CT検査：腹膜にLow density lesion多数。脾外側にcystic lesionあり。

【経過】2001年1月16日 入院。18日 開腹術施行。腹水多量、その中に直径3~7mmの腫瘍無数にあり。脾と虫垂切除部、大網、腸管膜に転移認め、腹腔内洗浄の

み行った。病理診断にて腹膜偽粘液腫と診断。

3月13日~6月5日 抗がん剤(UFT-E)内服。

8月24日、9月5日 エコー下にて腹水穿刺吸引、シスプラチン注入療法。

その後、腹水貯留少なく経過観察中だが、膵臓および腸管は浸潤により一塊となり病態は進行していると思われる。

【まとめ】腹膜偽粘液腫は、卵巣あるいは虫垂の粘液産生腫瘍の腹膜への播種により生じ、粘液様物質が腹腔内に大量に貯留した結果、腹部膨満、腹痛などの症状を生じる。外科的治療法のみでの予後は不良で5年生存率は20%以下だったが、加えて腹腔内洗浄療法と抗がん剤の腹腔内投与がおこなわれるようになり予後は改善されてきている。しかし、長期予後はまだまだ良好ではなく長年にわたる経過観察が必要とされている。

本症例では、腹水中に浮遊する無数の高エコーが特徴的であり、腹水および腹腔内臓器の経過観察、腹水穿刺吸引と抗がん剤腹腔内投与のガイドとして超音波検査が有用であった。連絡先0739-22-5000(内線306)